

---

# 獄潰し ~人はこれを度胸試しと呼ぶか否か~

雨月

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

獄潰し～人はこれを度胸試しと呼ぶか否か～

### 【Zコード】

N7771K

### 【作者名】

雨月

### 【あらすじ】

もしかしたらやったことがあるかもしない度胸試し。

## (前書き)

注意：この小説を読んでくれた方が一人でも苦笑したら作者の勝ちです。勿論、鼻で笑つたとしても作者の勝ちとさせてもらいます。

獄潰し　～人はこれを度胸試しと呼ぶか否か～

スーパー内に内接されている本屋『犬の餌』。学ランに袖を通して、一人の少年がゲーム雑誌を立ち読みしていた。彼の名前は天道時時雨。何処にでもいそうな少年Aでも名前は構わないのだがそれはそれで厄介であり、何処にでもいそうななどいうと『それじゃあ、便所にも沸いて出てくるのかよ』といった揚げ足を取ろうとするお話にならない人がいるかもしれないというので名前がついているのである。

「ふむふむ……」

今更、本を読みながら（しかも、他に客がいる前で）『ふむふむ』もないだろう。一人で本を読んでいるときに……というか、独り言を言う人は基本的に危ない人だと思っている人も多い。『オタクは基本、一人のときはぶつぶつ言っている』というのがとある友人の見解である。勿論、これが全般的に当てはまるものでもないし、オタクの人たちから見たら『俺たちはそこまで酷くないぞっ』と言いたくもなるだろう。つまり、オタクの一部の人たちが『ぶつぶつと独り言を言う』と表記するのが正しいのかもしれないのだが面倒なので割愛させてもらつていてる。

「やあ、時雨君じゃないか」

時雨が偶然ギャルバーのページを捲つたときに時雨の友人である霜崎賢治がやつてきた。この少年の場合は少年Bなどではちょっと言い表せないために名前表記が必要である。もつとも、普通の人などこの世の何処にもいないということを先に言つておこう。自分が思つてゐる『普通』と他人が思つてゐる『普通』は違うものである。まあ、ここでも論じても仕方がないので『人それぞれ』という言葉を

残したいと思つ。

「おや、美少女が出てくるゲームのページを見ていたんだね」

「偶然だよ」

この場合は本当に偶然だが人によつては『偶然』やつてきた友人にウソをつく人もいるのである。

「そりかい、それは勘違いをしてすまなかつたな」

「いや、別にいいけど……」

友達の仲も此処までくればすばらしきというものである。どんなにおかしいことを言つても許されるという友人はなかなかいないので。

「それより、せつかく本屋にいるのだから度胸試しをしてみないかだ。」

「い」

賢治は時雨にそう提案するが、時雨のほうはいまいち理解できていない表情だつた。

「本屋で度胸試しつて……何するの」

「簡単だよ、エロ本を買ってくればいいんだ」

「……」

時雨は驚いたというより呆れたような顔をしており、賢治のほうはさつさと成人指定とかかれたほうへと歩いていつている。

「……はあ」

友人としての付き合いは長いものだが、いまだにつかみどりが無いなど時雨は思いながらついていくのであつた。

「よし、じゃあまずはタイトルを選ぼうか」

「……そうだね、それをしないと始まらないからね……」

「先制は君に譲ろう」

「……ありがとう」

「どういたしまして」

時雨は顔を真っ赤にしながらタイトルを一生懸命選ぶのであつた。

出来るだけ普通のものを選びたいのだがエロ本でどれが普通で普通ではないのかわからないのである。

「じゃあ、この『メイド淫べジ』で

「これまたマニアックな一冊を選んだね……『夜専用ペ  
ット～首輪～』で行こうかな……」

それぞれがエロ本をもつてレジのまへくへと歩いていく。

「ルールは簡単だ。お互いに本を店員に渡して本のタイトルを述べ  
た後にこれをくださいと言つ」

「……うん、それで……」

「まずはこれをクリアしてもらわなことどうしようもないね

「……わかったよ」

時雨が先にレジの店員さんにエロ本を手渡す。

「この『メイド淫べジ』ト～くださ～」

「……はい、お買こ上げありがとび～ざこます」

顔を真っ赤にして告げる少年を店員はじつ見たのだひつか……だ  
が、店員さんの営業スマイルは崩れることは無かつた。

時雨にとっては生まれて初めての体験。身体が固まり、田の前が  
ゆがむ。店員さんの顔を見ていたつもりだったのだがお会計を終え  
た後に思い出すことなど不可能だつたりする。

「……よかつた」

「じゃあ、次はぼくの番だね」

そういうて賢治も自分の持つていたものを提示し、微笑んだ。

「この『陰乱～またも登場、お股の又兵衛～』くださ～」

「……はい、お買こ上げありがとび～ざこます」

恙無く商売は進み、これまた賢治も無事にクリア。お互いクリア  
してしまつたのだから引き分け……そう時雨は考えていた。

「じゃあ、僕はこれで……」

「待ちたまえ」

時雨の肩に手を置き、引き止める。

「あと十分、待とうじゃないか」

「え、何でさ」

「十分後、バイトとして畠中がここにやつてくるんだ

「げ、マジで……」

霜崎亜美……霜崎賢治の親戚にして時雨のクラスメートである。なんとなく可愛い、性格もそれとなく可愛いという中堅どころの女子といつても問題はないのだが考え方をしていくときが間々ある。誰が呼んだか『妄想中アーニー』という仇名がついたりしている。

「クラスメートにばれるのはやばいでしょ」

「別に構わないよ。君がこの勝負を降りたとしてもね……だけど、君が工口本を買ったという事実に変わりは無い。後は亜美の口から皆に触れ回るのか、ぼくの口から面白おかしく話を変えられて皆に触れ回るのかの違いだよ」

「くっ、最初からこれが目的だったのか……」

「ふはははは、展開を読めない男は嫌われるぞ、時雨君」

「こつして、誰も予想していなかつたであろつ第一ラウンドが始まつたのである。

工口本コーナーへと再び移動し、時雨はタイトルを上から下へと探していた。

「……できるだけ普通のタイトルを見つけるんだ……」

「おいおい、工口本に普通も何も無いだろ」

「……いや、あるはずつ……目を瞑つて感じるんだ……そつすれば導いてくれるはずだつ」

時雨は目を閉じて深呼吸。指先に全神経を集中して……一つのタイトルを掴みあげた。

『老化光線獣つ！ ～十代があつといつ間に美熟女につ～』

「すつじこ「アなタイトルが来たアつ」

「おめでとう、君の『直感』には恐れいつたよ」

賢治は時雨の後ろで拍手を送っていた。

「おっと、先に言つておけたまゝもつ本を貰えるのは……黙だからね」

「ぐつ、仕方ない……僕はここつで戦つて見せやん」

「わあ、次はぼくの番だね……」

一人の熾烈きわまる戦いは続くのか……

「続く……言つておきますがこの小説の続編が出るのか、出ないのかは不明です」

(後書き)

ん、この小説が続くかどうかって……ちょっとわからないですね。面白い小説だつたならば続編は望めますよ。え、この小説が面白いかどうか……それもまた、わかりませんね。だって、誰かに言われないとわからないでしょ。自己満足の小説ならチート小説で充分です。ええ、これもチート小説ですよ。主人公は最強です。何せ、目を瞑つてもマニアックなタイトルを選びますからね。これをチートといわざして何というのでしょうか……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7771k/>

---

獄潰し～人はこれを度胸試しと呼ぶか否か～

2010年10月8日15時22分発行